

毛沢東の死

混乱と再統一の図式

中嶋嶺雄

(東京外語大助教授)



毛沢東中国共産党主席の死によって、いま中国は大きく変わろうとしている。いわゆる江青女史を中心とする上海グループと文革派と、鄧小平失脚後の軍と新実務派との争いの中で、混乱・再統一の図式が激しく論議されようとしている。

山雨来らんとして……

「山雨来ラント欲シテ風楼ニ満ツ」^{『無可奈何花ノ落チ去ルヲ』}——亡き周恩来首相が当面の世界情勢を「天下大乱」の相と描いたとき、中国ではあまねく人口に膾炙したこの七言絶句を引いたのであるが、この詩句は、いままさに毛沢東の死に出会った中国それ自身にたいしてこそ、ふさわしいのではなからうか。

康生（十二月十六日、七十七歳）、周恩来（一月八日、七十八歳）、朱徳（七月六日、九十歳）、そして毛沢東（九月九日、八十二歳）と、この九カ月ばかりのあいだに、中国共産党の長老たちは相次いで逝った。いかに天命とはいえ、そこになにか凶兆を感じないわけにはいかないほどの死そして斃である。しかもこの間、

1 文革派の行方

中国の政治社会は大揺れに揺れた。周恩来死後、急遽沸き起こった「走資派」批判、驚天動地の天安門事件、そして鄧小平再失脚、北京のソ連大使館爆発事件など一連の不穏な動き、中国の心臓部を痛撃した河北大地震。しかもこの大地震は「人が天に勝つ（人定勝天）」はずの「毛沢東思想」の思わぬ脆さをさらけ出し、人心の動揺をさそったのであったが、喧伝された地震予知に肝腎のときに成功しなかった中国が、再び北京に地震が起こるとして異例の外国人退去勧告さえおこなったところ、その予測が的中する代わりに、ついに毛沢東の死という最後の事態にたちいたったのである。

中国民衆はいま、その悲痛の半面、心の動揺を懸命におさえようとしているかに思われる。中国はこれからどうなるのであろうか。たとえ、毛沢東の死によって、一つの重々しい時代の終焉を密かに感ずる人びとであろうとも、中国の将来への巨大な不安からいま逃れることはできない。

まさに状況は「無可奈何花ノ落チ去ルヲ」であり、「山雨来ラント欲シテ風楼ニ満ツ」といわねばなるまい。

毛沢東の死は、そのような相次ぐ政治的激動の果てに訪れただけに、当面は巨星墜つた緊迫感のなかで、ある種の政治休戦が続くであろう。その意味で毛沢東の死は当面の「政治的凝集力」として作用するかもしれない。だが、それにしても、中国の内政には深刻な角逐が渦巻いているのであって、毛沢東以後の権力構造の再編をめぐる困難さは、すでに毛沢東の死が発表されたその日から暗示されていた。

それは、毛沢東の葬儀（九月十八日）にかんして葬儀委員長の名が明示されなかったことにまずあらわれていた。過般の周恩来の葬儀の際には、葬儀委員長（毛沢東）が公表され、周知のように、鄧小平副総理（当時）が全人民を代表して、いわゆる「走資派」の立場からきわめて挑発的な弔辞を読み、このとき以来、文革派による鄧小平打倒が始動されたのである。公式の儀式がそのまま政治的秩序の反映の場となる中国において、とくに葬祭の儀に敏感な中国社会において、誰が葬儀委員長

になり、誰が全人民を代表して弔辞を読むかは、きわめて重要な意味をもつ問題である。いうまでもなく、毛沢東以後の党主席選任の問題に直結する重要性をもつ問題であるが、今回は、党中央政治局常務委員として残る華国鋒・党第一副主席兼國務院首相、王洪文・党副主席、葉劍英・党副主席および張春橋・政治局常務委員の四名が別格で列記されたにすぎなかった。

本誌が発売される頃までに中国は毛沢東の葬儀を経て十月一日の國慶節を迎えるので、そのときまでには状況がもつと明白になっているであろうが、それならばなぜ、四月の天安門事件の結果、急遽、党規約にもない「第一副主席」の地位に就任し同時に首相にもなった華国鋒が今回、葬儀委員長として当初から発表されなかったのであろうか。いずれにせよ、党中央は、近い将来、毛沢東後継者としての党主席を選任しなければならぬが、ここで問題は、現行の憲法と党規約の定めによって、党主席には軍をも含む中国のすべての権力が集中する権力構造を、今日の中国はすでに形成してしまっていることである。

もとより、このような党主席への権力集中

は、毛沢東主席にたいしてのみ許容されたもの（あるいは、せざるを得なかったもの）なのであって、毛沢東以外の指導者にこのような集中的な権力の行使を許し得るものかどうかという問題がまず前提的に存在する。

かりに現行の政治秩序がそのまま移行して華国鋒が党主席に就任したとすれば、彼は國務院首相もそのまま兼務するのであろうか。

もしもそうだとすれば、党主席兼首相という毛沢東も周恩来も任じ得なかった地位に就くことになり、華国鋒が、そのような圧倒的地位を長期安定的に保持し得るものとは考え得ない。党主席選任をめぐる問題をこのように考えただけでも、今日の中国の政治の中核にはきわめて困難な課題が山積しているが、もしもこのような困難を避けて、権力を分散するような措置を講じ、党主席を空白にしておく（たとえ代行）ようなことがあれば、そのことは、党主席選任をめぐる党内闘争をかえって激化させずにはおかないであろう。中国共産党中核のこのような現実のなかで、当面の関心がいわゆる文革派の将来に集中するのはやむを得ないところである。もとより、中国の当面の政治は、「毛沢東思想」

彭徳懐、華国鋒などが知られており、後者については林彪や董必武も湖北省出身であったが、毛沢東亡きあとは、これら湖北グループが湖南の華国鋒とともにまさに「湖南湖北一家人」として上海グループに対抗してゆくことになるかもしれない。

いずれにせよ、湖北グループを中心とする軍と、上海グループ＝文革派とのあいだには大きな溝があると思われる、このことは過般の天安門事件に際しては、江青、王洪文率いる首都工人民兵や各地の都市民兵が汪東興率いる北京の八三四一部隊（中央警衛団）とともにクローズアップされたのたいし、七月下旬の河北大地震以降は、正規軍としての人民解放軍の存在が、あたかも各地の民兵と拮抗するかのようになり、その救援活動を通じて脚光を浴び、こうした軍の活動を華国鋒首相が強力に支援していたことにもあらわれていた。

第三には、やはり天安門事件で明らかになつたように、文革派指導者として、江青夫人と文革の火付け役、姚文元・政治局委員にたいする中国民衆の批判がきわめて根強いことである。毛沢東の前々夫人の名を挙げて「楊開慧同志を悼む」とのスローガンが清明節に

ないしは毛沢東路線からの偏向や逸脱にたいして過度に警戒的になるであろうから、文革派は「毛沢東思想」の解釈権を一手に保持しようとする努力、あらゆる意味で毛沢東権力の継承権を主張するであろう。われわれは、いわゆる文革派という場合、本来的に文化大革命を先頭に立って担った林彪・副主席（当時）や陳伯達・文化革命小組組長（当時）がいずれも文革派それ自身からはじき出されたかたちで失墜してしまつた以上、文革派とは、江青夫人を中心として形成された閩族の政治集団、いわゆる上海グループを指さざるを得ない。具体的には王洪文、張春橋、江青、姚文元、汪東興らの指導者をすくりに列挙できるが、これら文革派は、毛沢東側近として強権的な家長体制を形成し、それを担ってきた集団であり、それだけに、毛沢東亡き今日、その前途には大きな不安が横たわつている。

まず第一に、去る一月下旬、周恩来亡きあとの首相選任をめぐる党中央の会議で、張春橋ないしは江青夫人を推す動きにたいして、亡き朱徳らの長老が強硬に反対したといわれる情報の確度が高いだけに、毛沢東亡きあとの文革派に対する党中央の強い風当たりとい

掲げられたこと自体、江青夫人にたいする痛烈な批判であつたが、周恩来首相を追慕するスローガンの頻出のなかで対照的に目立つたのは、たとえば「冷眼逢雀翻妖風、熱血一腔染江流」（冷やかに見る、淫らなイデオログたちが妖しい風を吹きちらすを、八再革命のV熱血はほとばしり長江の流れを染めぬ。「妖」は「姚」つまり姚文元を指し、「江」は江青を指す）といったような、江青、姚文元批判の詩句であつた。

このような状況のなかで、当面の中国は、文革派と実務派（いわゆる「走資派」および旧実務派を含む）の抗争のなかにその将来の方向を進めねばならないであろうが、私はこの場合、華国鋒や呉徳・北京市革命委員会主任（全国人民代表大會常務委員会副委員長）らを両者の中間的なバランスとして、新実務派（張春橋が姚文元との対立の経緯（北京の外交筋には、「走資派」批判から天安門事件とその処理にかんする経緯のポイントは張春橋と姚文元の対立にあつたとする見方さえあるが、昨春のプロレタリア独裁理論をめぐる両者の対照的な論文、姚文元「林彪反党集團

う零困気を容易に察することができよう。第二には、「政権は銃口から生まれる」といわれる中国の政治構造のなかで、たとえ制度的には「党が軍を支配する」状況に復帰しているとはいへ、軍の動向が最後のなカギを握るものと思われるが、軍が文革派を支持していることとみなし得る根拠はきわめて少ない。政治局に残る軍の長老葉劍英・党中央軍事委副主席（国防相）は周恩来系統の実務派リーダーとして知られており、もう一人の長老劉伯承・党中央軍事委副主席は旧第二野戦軍司令として旧第二野戦軍政治委員だつた鄧小平に近いとさえいわれてきた。しかも、北京軍区司令の陳錫聯（副首相）、広州軍区司令の許世友（国防次官）、瀋陽軍区司令の李徳生ら党中央政治局委員を兼ねるこれら軍の実力幹部は、三人揃つていざれも周恩来系統の実務派の長老李先念副首相と同郷であり（湖南省黄安県出身）、この事実も、一方の文革派＝上海グループが閩族の集団として形成されてきただけに、意外に大きな意味をもつものと思われる。

「湖南湖北一家人」といわれるように、中国共産党のリーダーには湖南省、湖北省出身者が多く、前者については、毛沢東、劉少奇、

の社会的基礎について」△『人民日報』三月一日Vと張春橋「ブルジョア階級にたいする全面的独裁について」△『人民日報』四月一日Vは、その明示的なあらわれであつた）からして、その政治的リアリズムのゆえに文革派の立場をすでに離れ、新実務派の立場に移行しつつあるとみなすこともできよう。

このような不安定な政治状況のなかで、文革派があくまでも毛沢東継承権を主張すれば、中国内政の激動と混乱は避けがたく、その余波は軍内部や地方各省にまたたくまに波及して中国第二革命の呼び水にもなりかねないであろう。そのような混乱を回避する道は、新実務派と実務派との連携体制のもとで徐々に文革派の政治的影響力を排除し、「四つの現代化（農業、工業、国防、科学技術の現代化）」を中心とする周恩来路線へと回帰することであろうが、そのような方向は、過般の河北大地震によって今日の中国が真に求めるべき社会主義建設の方向であることとを改めて知らされたはずでもあるので、いずれにせよ、長期的には「非毛沢東化」の政治過程は不可避であり、文革派の将来に希望は少ないように思われる。

2 毛なき中国とソ連・アメリカそして台湾

毛沢東の死は、一方のソ連が長く待望していたものであった。ソ連側の公式見解を反映していると思われるスミルノフ・ノーボスチ通信社政治評論員が、毛沢東の死に際して、「これは中国の将来にとって//いいことだ//」と述べていたのは、そのようなソ連の願望を反映したものであった。ソ連の側として//中ソ友好のルネッサンス//を夢見ているわけではないが、毛沢東以後の中国にたいするソ連の期待がいかに大きなものであるかについては、私自身も、訪ソしてソ連側の要人と話し合った感触をこれまでに本誌にも記したことがある。(拙稿「鄧小平失脚//の意味するもの—モスクワ・香港ルートから—一九七六年五月号参照」)

一方、中ソ対立の最大の要因は、まさにスターリンへの反感からフルシチョフとの対立を経て、ブレジネフへの反撥にいたる毛沢東個人の積年の対ソ不信にあったともいえるのであり、徹底した反ソ主義者としての毛沢東個人の対ソ観・対ソ意識こそ、中ソ関係を規

定してきた根源でもあっただけに、毛沢東の死はソ連側を大いに刺激し、鼓舞するであろう。いずれにせよ、毛沢東の死が中ソ冷戦ともいえる今日の中ソ関係改善への出発点であることはいうまでもない。毛沢東の死に際して、ソ連側がすでにモスクワの中国大使館へマズロフ、グロムイコ両政治局長を弔問につかわし、党としての弔電を打ったことなどは、周恩来死去の際に比して明らかに流動的な対応であるだけに、中国側は、当面、そのようなソ連の揺さぶりにたいしてきわめて警戒的かつ慎重になるであろう。

中国外務省スポークスマンは、九月十四日、ソ連、東欧諸国の党からの弔電を送り返したことを明らかにした。この一事にも見られるように、後継リーダーたちは、当面、毛沢東路線を頑なに継承しようと競うであろうし、そのような立場が継続するかぎり、中ソ関係の急激な改善は望めないであろうが、しかし、にもかかわらず毛沢東はすでに亡いのである。ソ連は、ここ数年來、毛沢東以後の中国内部の変化を久しく待ち望み、対ソ宥和の潮流の抬頭に希望をつないできているだけに、当面、硬軟両様あらゆる手段をつくして

ここぞとばかり積極的な外交戦略をすすめるであろう。

ソ連としては、ここ一年ぐらゐのあいだに、まず外交関係から着手し、党関係改善へのステップをなんらかのかたちで刻もうとするであろう。その場合、一九六九年の中ソ軍事衝突以来、中ソ国境に配備してきた軍事力をテコに、中国内部の軍のなかにこれ以上の対ソ関係の悪化を避けようとする勢力が抬頭することに期待をつなぐものと思われる。もとより、ソ連としても、当面は、このような中国内政の流動化に待つ以外に手だてはないのだが、中国共産党の党内闘争史にはつねに中ソ関係がビルト・インされてきたという、この宿命的な相関関係を、われわれは無視できないように思う。もしも、中国内部に劉少奇、鄧小平タイプの旧実権派型のリーダーシップないしは周恩来路線に近い実務派型のリーダーシップが定着したときには、中ソ関係にも大きな変化が生ずるであろうし、そのような変化への可能性は、毛沢東の死によって大きくなるものと見なければならぬ。

中ソ関係は同時に、中国にとつてもう一つの重大な国際関係である米中関係を規定す

る。今日、すでに米中正常化への歩みが成熟段階に入りつつあるとき、たまたま毛沢東死亡時に中国を訪れていたシュレンジンジャー前米国防長官の訪中を中国がどのように遇するかは、米中関係にたいする中国の当面の対応を知る一つの重要な手がかりであった。周知の対ソ強硬論者シュレンジンジャー氏は中国にとつてきわめて重要な人物であるが、毛沢東死亡のため、華国鋒首相らとの会談が一たんはキャンセルされたのに、再びその日程が復活したことは、やはり中国側の関心の高さを示している。

アメリカにとつては、フォード・ロッキンジャー路線が継続するにせよ、カーター新路線が実現するにせよ、その世界戦略にとつて中ソの和解こそ最大の悪夢であるだけに、アメリカは、そのような中ソ関係の変化の可能性を極小化すべく、当面、従来以上に米中接触を深めるであろう。このような方向は、昨年十二月の「新太平洋ドクトリン」で明白になった米・日・中の太平洋横断的連携 (Trans Pacific Coalition) の基本戦略に沿うものであり、アメリカは今後、米中間の国交樹立へと進みつつ、米中の軍事情報の交換をはじめ

一定程度の準軍事的援助への道へもふみきるかもしれない。このようなアメリカの戦略は、米中国交への代償として台湾への武力不行使という約束を中国側から取りつけることを前提とするものであるだけに、毛沢東という最終決断者を失った中国内部を揺さぶるであろう。

最近の米中交渉における中国側の台湾問題にたいする態度は、きわめて原則的だといわれており、武力不行使の保障をアメリカ側がとりつけかねているとの情報があるが、この場合、中国の軍首脳は、やはりその職能上か

勇氣ある主張 正論を喚起する

ズビデ 討論会

● テレビ・テイスカッション番組

(日) アサ 7:30

(木) ミ 11:45(再)



らも原則論者であろうし、対ソ宥和への流れの筋からしても、逆に対米強硬へと傾くかも知れない。

当の台湾は、毛沢東の死にたいして、きわめて平静であった。蒋介石を失った台湾としては、近い将来の毛沢東の死を十分に織り込んでいたのであるが、やはり、毛沢東および周恩来と蒋介石という第一世代の敵対者が亡くなったあとの両者の関係には何らかの注目が必要であろう。もとより、台湾側としては、依然として「光復中華」のスローガンを降ろさず、毛沢東死後の大陸の動乱を期待しているが、当面は軍の動向にとくに注視し、「走資派」復活の可能性を見ながら、やはりソ連の出方を大いに注目しているようである。ソ連の出方といえば、かつて香港の観測筋は、毛沢東亡きあとの中国内部の動乱を予想して、ソ台両軍による大陸挾撃の可能性に触れたことがあった(岳中石「毛沢東死後の大陸発展は如何」、「中華月報」(香港)一九七五年九月号)。台湾側はこのような動乱にたいする展望をまったく棄てているわけではない。

だが、果たして中国大陸がそのような動乱に陥るであろうか。また、ソ連の期待するよ

うな中ソ関係の改善、従って、中国内部のより親ソ的な政権の樹立が果たして可能であろうか。もとより、前途を断定しがたいが、問題は、近い将来、もしもそのような可能性が潰え去り、ソ連の期待が裏切られ、台湾側の願望も実現せずに、米中関係が大きく進展して台湾が米中間の谷間からひとり浮上したときであろう。このときこそ、ソ台関係が本格的に始動し、アジアの国際関係のなかに大きな問題をつきつけることになるかもしれない。長期的にはそれほどまでに事態は流動的だといえよう。いずれにしても、中国内政の将来がすべてのカギであるように思われる。

3 天安門は知っている

過般の河北大地震は、たんに中国の社会主義建設と工業化計画の脆弱性を露出させたのみならず、「毛沢東思想」に依拠した社会主義建設の陥穽を中国民衆に気づかせてしまった。中国では、ここ数年來、「戦争に備え、災害に備え、人民のために」というスローガンや「深く地下道を掘り、広く食糧を蓄え、覇権を求めない」とのスローガンがもつとも

普及したスローガンであっただけに、中国が原爆にも耐えたと内外に誇示していた地下壕が今回の地震で大きな打撃を受けたと推定されるなど(中国側は、地震の結果、地下壕がどうなったのかをはじめ一切の被害状況を秘匿している)、右のスローガンがいかに非実態的なものであったかを知らされたときの中国民衆の衝撃は大きかったであろう。

中国は、こうしていま人間の主観的能動性に依拠した毛沢東型社会主義建設の陥穽に気づいたとき、いわゆる「四つの現代化」路線に本格的に着手すべきであろうが、昨年一月の第四期全国人民代表大会で周恩来首相の提案に基づいて承認されたこの路線については、今回、毛沢東の死と同時に発表された党と政府の「全党全軍全国各民族人民に告ぐる書」もついに一言も言及していない。この「告ぐる書」は、毛沢東亡き中国の当面の方針を示したものだと思われるだけに、中国は再び「貧困のニートピア」を求めゆくのことも思われよう。しかし、今日の中国民衆は、昨夏の杭州事件から今春の天安門事件にいたる激動が示したように、「四つの現代化」の路線に大きく期待し、そこに希望をつないで

いると思われるだけに、中国民衆の多くは、まもなく「貧困のニートピア」の夢から醒めゆくであろう。

天安門事件に際して「中国は過ぎし中国にあらず、人民も愚かきまわれるものにあらず、秦始皇の封建社会は再び返らず、……四つの現代化なりし日には、われら酒を供えて祭らん(中国已不是過去の中国、人民也不是愚不可及、秦皇的封建社会已一去不返了、……四个現代化日、我們一定設酒重祭)」と唱えた民衆は、きわめて自覚的な政治意識のもとで天安門広場に集まったのであった。その数は、

首都北京だけで延べ百万にもものぼったと報ぜられたが、これらの民衆は、今回の毛沢東の死を真実のように感じているのであるうか。

私にとって一抹の不安は、毛沢東政治がこれまで一方であまりにも多くの政治的犠牲者ないしは敗北者を産出してきたものであるだけに、その反作用が強く起きはしないかという点である。つまり江青、姚文元ら毛沢東側近への不満や批判が、一挙に「毛沢東批判」へと連続する可能性を完全に否定し得ないことであり、そのようなときには、林彪事件の真相をはじめ中国政治の数々のミステリーが一

挙に解かれることになるかもしれない。それからミステリーを含めて、そのすべてを知りつくしているはずの天安門は、また同時に、毛沢東亡き中国の将来をもおそらく見透かしているのではなからうか。あるいは、かつて一九四九年十月一日、毛沢東がその樓上で「中華人民共和國今天成立了!」(中華人民共和國本日成立した)とかん高く叫んだとき、その脇にいた劉少奇、朱徳、周恩来、高崗、彭徳懷、林彪らが毛沢東とともにもう一度力強くスクラムを組んで樓上に並ぶよう、天安門はおごそかに命ずるかもしれない。

現代演劇協会・三百人劇場
10月スケジュール

■劇団昴第3回公演■



アイルランドのシェイクスピア
シングの傑作喜劇

あつぱれ 我等が 大ぼら吹き

親父を殺した小心者
驚いたことに、それで大もて
強爽として英雄きどり
それから先は?

久米明・内田稔・小沢左生子 他出演
10月1日(金)→13日(水) 6日休演
開演6:30 土・日ヒル1:30 日曜ヒルのみ
入場料 2,000円

■土曜講座 下半期第2回■

10月23日(土) 3:00開講

高坂正堯

現代の指導者危機

福田恆存

処世術から宗教まで

第2部II

聴講料 一般1,000円 学生500円

お問い合わせ・お申し込みは

03・944・5451